

## 英語スピーキング力を伸ばす指導法とその評価

研究期間 平成 29 年度～平成 29 年度

研究代表者名 麻生 雄治

共同研究者名 なし

### 1 はじめに

文部科学省は、コミュニケーション能力を育成するために「講義形式の授業から、例えば、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどを取り入れることにより、生徒の言語活動を中心とした授業へと改善を図る必要がある」と述べている<sup>1)</sup>。しかし、実際には、スピーチはおろか、英語での自己紹介を 30 秒間以上よどみなく話すことすら難しいと思う学習者は少なくない。

これまでの授業では正確さを過度に重視し、コミュニケーションに必要な流暢さを妨げてきたという問題点から、今年度は「英語がこれまでより流暢に話せる」ようになる授業を計画し、実践を試みた。本稿では、ワードカウンターを使用し、発話語数の計測に基づくスピーキングの流暢さに焦点を当てる。流暢さとは、過度の中断や言いよどみなく音声言語を産出する能力のこととする。

### 2 ワードカウンター使用のメリット

- ①発話した語数を計測することで流暢さ（の向上）を客観的に知ることができる。
- ②流暢さに関して一定の評価を与えることができる。
- ③聞き手が計測しながら相手の話を聞くことができる。
- ④英語を話すことに関するモチベーションが高まる。

### 3 ワードカウンターを使用した授業実践

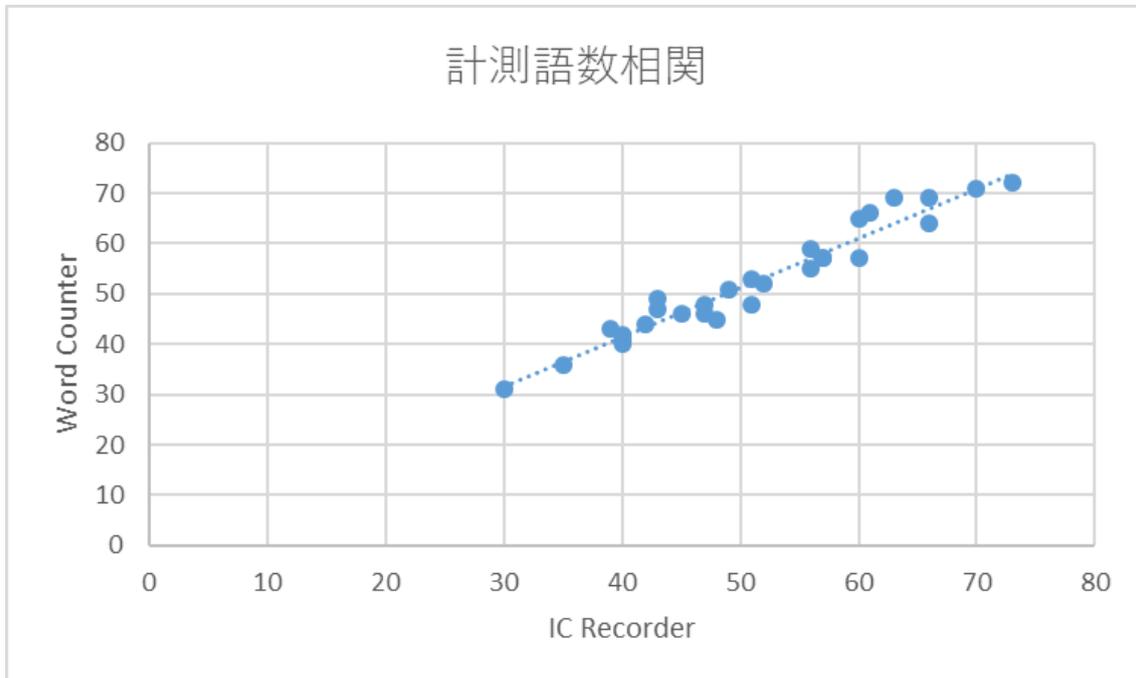
毎授業時間の帯活動として、10 分間程度のスピーキング活動を行っている。一つは、ペア活動で、話し手はスライド上の語（例えば、「折り紙」「七夕」など）を 30 秒で説明し、その語を知らない聞き手がその説明を聞いて推測するスピーキング練習と、もう一つは与えられたテーマ（例えば、「夏休みにしたいこと」など）について 60 秒で相手に説明するスピーキング練習である。聞き手は話し手の発話を聞きながらカウンターで語数を計測し、その都度記録する。

### 4 ワードカウンターの信頼性

ワードカウンターの信頼性を測定するために、「私の趣味」について 60 秒間話したものを（参加者：大学生男女 30 名）、IC レコーダーで録音しながら、ワードカウンターで計測し、語数を比較

した。その結果、誤差は少なく(いずれも 10%以下)、信頼性( $r=0.983$ )が確認された(図1)。

図1:ワードカウンターによる計測とICレコーダーによる計測の語数の相関



## 5. 研究の目的

ただ単に「英語を話さない」ではなかなかスピーキング力は向上しない。では、どのような練習がスピーキングの流暢さを向上させるために効果的だろうか。そこで本研究では、pre-speaking 活動の違いによって、流暢さに及ぼす効果に違いがあるか否かを調査し、流暢さを向上させるための指導法を検討することを目的とする。

## 6 調査の方法

6.1 被験者：大学生男女 51 名。等質の 3 グループ（グループ A～C の各 17 名）。

### 6.2 方法（手順）

#### 6.2.1 調査 1

1) グループ A～C：ペア活動で、話し手が前面に示された語「Karaoke」を、（その語を知らない外国人と想定された）聞き手に英語で説明する（30 秒間）。聞き手は聞きながらワードカウンターにより話し手の発話語数を計測する（1 回目）。

2) グループ A の話し手は、2 分後に再度同じ語の説明を 30 秒間で行い、聞き手は計測する(rehearsing)。グループ B の話し手は、前面に示された説明のサンプルを 2 分間見た後に再度同じ語の説明を 30 秒間で行い、聞き手は計測する(modeling)。グループ C の話し手は、話す内容を 2 分間で英語で書いた（英作文）後に再度同じ語の説明を 30 秒間で行い、聞き手は計測する(writing)。話すときは書いた作文を見てはいけない。

### 6.2.2 調査 2

1) グループ A～C：ペア活動で、話し手が前面に示された話題“The country/city I want to visit.”について、聞き手に英語で説明する（60 秒間）。聞き手は聞きながらワードカウンターにより話し手の発話語数を計測する（1 回目）。

2) グループ A の話し手は、4 分後に再度同じ語の説明を 60 秒間で行い、聞き手は計測する(rehearsing)。グループ B の話し手は、前面に示された説明のサンプルを 4 分間見た後に再度同じ語の説明を 60 秒間で行い、聞き手は計測する(modeling)。グループ C の話し手は、話す内容を 4 分間で英語で書いた（英作文）後に再度同じ語の説明を 60 秒間で行い、聞き手は計測する(writing)。話すときは書いた作文を見てはいけない。

### 6.2.3 調査 3

1) グループ A～C：ペア活動で、話し手が前面に示された話題“Buddhism.”について、聞き手に 60 秒間で英語で説明する。聞き手は聞きながらワードカウンターにより話し手の発話語数を計測する（1 回目）。

2) 調査 2 と同様に行う。

## 7 結果と考察

まず、30 秒スピーキングによる平均発話語数を表 1 に示す。30 秒スピーキングでは、2 度同じ話題について話をすると、2 回目のほうが流暢さが高いとことがわかる。また、1 回目と 2 回目の平均発話語数の差から、グループ C（話す内容を一度英作文にすること）は、3 つのグループの中で流暢さを最も助長する働きがあるといえる。

表 1 30 秒スピーキングにおける平均語数

	1 回目	2 回目	差
グループ A	16.9	21.5	+4.6
グループ B	16.8	22.0	+5.2
グループ C	15.1	24.4	+9.3

次に、60 秒スピーキングの“The country/city I want to visit.”という身近な話題についての平均発話語数を表 2 に示す。この結果から、30 秒スピーキングと同様、グループ C の英作文を書くグループは流暢さを最も向上させている。このことから、話そうとする内容を一度作文にすることは、頭の中で次に話そうとすることを考える（リハーサルする）より効果があるといえそうである。

表 3 には、60 秒スピーキングの“Buddhism.”についての平均発話語数の変化を示している。「訪れたい国/街」という話題と比べると話しにくい話題であることがわかるが、ここでも、グループ C の英作文を書くグループが最も発話語数を伸ばしている。

**表 2 60 秒スピーキングにおける平均語数 (1)**

	1 回目	2 回目	差
グループ A	35.1	38.5	+3.4
グループ B	35.0	38.9	+3.9
グループ C	32.3	47.0	+14.7

**表 3 60 秒スピーキングにおける平均語数 (2)**

	1 回目	2 回目	差
グループ A	20.1	25.4	+5.3
グループ B	16.5	25.5	+9.0
グループ C	18.5	31.8	+13.3

## 8 まとめ

スピーキング指導において、「ただ単に何でもいいからとにかく話せ」ではなく、流暢さを高める一つの手だてとして、一度英作文として書かせるということは話す内容を整理でき、リテンションも高いと考えることができる。さらに効果的な方法があるだろうと思われるが、日常の授業におけるより効果的なスピーキング練習の方法を考える上では一つの示唆を示すものとなった。

## 9 今後の課題

今回の研究は、実践の一部を調査したものであり、サンプル数が少ないため、事例研究の域を出ない。今後はサンプル数を増やして再度実施する必要があるだろう。また、話す量はテーマの難易度に依存するという傾向もわかったが、どのような話題が話し手の発話を促進するか、またその逆も今後整理できると指導の順を考える上で役立つと思われる。

### 引用・参考文献

- 1) 文部科学省（外国語能力の向上に関する検討会）：国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策, 2011.

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf)

(2015 年 6 月 10 日参照)

.